

平成29年12月6日

あきる野市議会議員 殿

会 派 名 自由民主党志清会

代表者氏名 堀 江 武 史



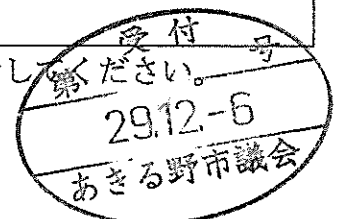
会派の（ 調査研究 ） 報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1 調査研究または 研修実施日	平成29年11月 8日(水)～ 平成29年11月10日(金) 2泊3日
2 調査研究または 研修の場所	11月 8日(水) 東京から沖縄県へ(移動)
	・OTS RENT-A-CAR (豊見城市)
	・うるま市IT事業支援センター (うるま市)
	11月 9日(木) 第79回全国都市問題会議 (沖縄県那覇市)
	11月10日(金) 第79回全国都市問題会議 (沖縄県那覇市)
3 調査研究事項 または研修名	11月 8日(水) ①OST RENT-A-CAR視察
	(水) ②うるま市IT事業支援センター視察
	11月 9日(木) 第79回全国都市問題会議 (1日目)
	11月10日(金) 第79回全国都市問題会議 (2日目)
	※2日目は、パネルディスカッション
4 参加者氏名 (9 名)	堀江武史 子籠敏人 天野正昭 中嶋博幸 村野栄一
	窪島成一 (日原省吾 中村一広 臼井建
5 調査研究または 研修の概要及び 感想等	別紙のとおり

※ 自家用車を使用した場合は、必ず自家用車使用報告書を添付してください。



【概 要】

● 視察報告

(1) 平成 29 年 11 月 8 日(水) 11:25-12:25

(視察先) OTS RENT-A-CAR 臨空豊崎営業所

(目的) インバウンド対応の成功例を学び、あきる野市における観光施策等の参考とする。



(内容) 観光立地の取組を進める沖縄県内で、早期からインバウンドを想定した事業展開を進め、実績を伸ばしているレンタカー会社(OTS RENT-A-CAR)を視察。会社の概要及び実績説明では、沖縄県の外国人観光客入域数を見据えたOTS RENT-A-CARの取組を紹介される。インバウンドという言葉が定着する以前から、海外(特に、アジア圏)をターゲットとした誘客に注力し、海外支店の出店やネット予約の推奨等を進めてきた実績(2008年に台湾に出店)により、現在、利用者の8割を海外(主に、台湾、香港、韓国、中国)から獲得している。また、年平均50%稼働すれば成り立つといわれるレンタカー業界にあって、同社は年平均70%、ハイシーズンは90%という極めて高いレンタカー稼働率

を誇っている。近年、外国人利用客絡みのトラブル（交通事故、駐車禁止エリアへの放置等）対応が増加していることが課題であり、トラブル解消に向け、日本語以外の言語に長けた社員獲得にも取り組んでいるとのこと。

（考察）国内の同業者との差異化（或いは、競合の回避）を図るため、海外の顧客に目を向け、先見の目を持って海外進出した攻めの取組は、企業ならではのもの。外国人観光客の入込数増は、地域社会（地域住民）に多大な影響を及ぼすことから、外国人対応のみではなく、地域住民対策も必要となる。インバウンドを進めていく上では、光の当る部分だけでなく、負の部分（リスク等を含む）にも配慮する必要がある。

（２） 平成 29 年 11 月 8 日（水） 14：15－15：50

（視察先）うるま市 I T 事業支援センター

（目的）地域産業の育成、起業促進のヒントを得る。



(内容) 大規模情報通信産業の誘致と併せ、地域に特化した情報産業の育成と起業家による新たな情報企業の創出を図ることにより、地域の活性化と雇用拡大に寄与することを目的とした同施設の管理・運営実態を視察。

(考察) 事業規模は異なるものの、内容的には、地方創生に資するものであり、あきる野市が推進している事業、子育てステーションこころのやB i s @ t a と同等の取組といえるが、指定管理の運営や経営等の観点から今後も継続してチェックしていく必要があると思われる。

(3) 平成 29 年 11 月 9 日(木) 9:30-16:30

(会議) 第 79 回全国都市問題会議 (1 日目) (沖縄県立武道館)

(テーマ) 「ひとがつなぐ都市の魅力と創生戦略 ～新しい風をつかむまちづくり～」



①基調講演「多様性のある江戸時代の都市」(東京大学史料編纂所教授・山本博文氏)

(内容: 要旨) 江戸時代は、参勤交代により、全国各地の大名が江戸と国元を行き来し、文化の伝播と経済的な交流を生んだが、移動手段や情報伝達手

段が発達した現在においては、遠隔地にも直接到着（或いは到達）することが可能となったため、中間地点の経由が不要となった。情報伝達や人々の移動手段が大きく変化した現在、地方が取り残されるという課題が生じている。今後の地方創生を考える上では、近代・現代の基礎が築き上げられた江戸時代の都市とその歴史を見直し、現在の我々にどのような影響しているのかを改めて考える必要がある。

(項目) A) 江戸時代の町の特徴…巨大都市（現在の東京・京都・大阪）の発展。

特に、江戸は100万都市と言われ、この規模は、当時のロンドン、パリに匹敵するものであった。

B) 城下町の特徴…「江戸三百藩」と称されるように、江戸時代には260程の藩があり、それぞれに城下町があった。

C) 有名な城下町…長州藩毛利家の城下町、鹿児島県島津家の城下町 等

D) 門前町…伊勢神宮、江戸大山詣り、信濃の善光寺、四国の金毘羅、出雲大社 等

E) 港町…物流の大動脈は日本海側の航路

F) 参勤交代とは…まちをつなぐもの。「勤」の字は、偉い人に会うこと、江戸に行って将軍に会う事。諸大名の服属儀礼。

G) ケンペル（ドイツ人）「江戸参府旅行記」

・抜粋(1)「この国の街道には毎日信じられないほどの人間がおり、季節には住民の多いヨーロッパの市街と同じくらいの人が街道にあふれている。これは一つには、この国の人口が多いことと、また一つには他の諸国民と違って、彼らは非常によく旅行することである。」⇒日本人は、用もないのに旅行をする。(旅行好き)

・抜粋(2)「身分や財力の許す限りの人数で立派な行列をつくる。それゆえ、最も大きい大名の場合は数日にわたって街道を満たすのである。」

※江戸時代の街道や町は、ヨーロッパ人も驚愕するほどの活気と賑わいがあったという記録であり、山本教授は、その賑わいを作り出してい

たのが人々の動き（都市間の移動）であったと考察。

H) 参勤交代の儀礼…他藩領を通るときは、使徒を遣わし領土内通行の許しを得る。

I) 徳島藩の参勤交代

J) 参勤交代の経済的負担

K) 大名・家臣の宿泊

L) 山陽道・矢掛宿に泊まった大名

M) 宿割（しゅくわり）と関札（せきふだ）

N) 旅籠費の交渉

O) 献上

P) 御見立て

Q) 通日雇と六組飛脚問屋

R) 江戸勤藩武士の買い物

S) 琉球使節の江戸上り…天保3年、薩摩藩の働きかけにより、琉球使節が江戸に来訪、大琉球ブームが起きる。⇒ 薩摩藩は異国の王までも支配下に置いていることをアピールし、幕府は、異国の王さえ挨拶に来るという事を庶民に見せることで、幕府の支配力が海の向こうにまで及んでいることを知らしめた。

T) 参勤交代制の大幅緩和

U) 島崎藤村「夜明け前」

V) 全国各地の町の繁栄

(考察) 参勤交代による江戸時代の人々の交流、つながりが地域文化や産業を発展させてきたことを紹介されたが、人々の移動様態やメディアの発達による情報伝達の変化により、中間地点の経由を要さなくなった現状を打破の方法論として提示されたのが地域文化の掘り下げのみであったので消化不良の感は否めない。参加者が欲しているのは、掘り下げた歴史・文化等を含む地域の魅力をどの様に活用すれば観光客を誘引できるの

か、或いは、人の流れを作り出せるのかという事から、あきる野市を経由するルート工夫や、またその経済効果の検討や取り組みなどを推進していく必要があると考える。

②主報告「ひと つなぐ まち ～新しい風をつかむまちづくり～」(沖縄県那覇市長・城間幹子氏)

(内容)まちづくりにおいて「人」をつなぐこと、「人」がつながることの重要性とその意義、「人」と「まち」がつながることにより生まれるまちの魅力を、那覇市の取組事例に沿って紹介。

③一般報告

A)「人口減少社会の実像と都市自治体の役割 ～人口とインフラの適正な持続的配備はいかに可能か?～」(首都大学東京大学院人文科学研究科准教授・山下祐介氏)

(内容)人口減少社会の要因、何故減少が止まらないのかという問いに対する答えとして、日本社会(日本人の心と社会)がバランスを崩しているという持論を展開するとともに、都市自治体の役割は、このバランスを取り戻すことにあると主張。また、国家と地方の関係についてもバランスを欠いてきている現状、過疎地に主眼を置いた人口とインフラ整備の関係について紹介。

B)「自然と都市が融合し共生が地域の価値を高めるまちづくり」(北海道釧路市長・蛸名大也氏)

(内容)得てして行政の評価は数値化して行われるが、数値では測れない価値を高めることにより、まちの魅力も高める施策展開を紹介。

C)「新たなステージに入った沖縄観光 ～複合的な魅力を有するハイブリッ

「ドリゾートへ〜」(琉球大学観光産業科学部長兼教授・下地芳郎氏)

(内容) 沖縄の歴史と現状を紹介し、観光とビジネスの相違や、新たな魅力創出についての持論を展開。

(考察) 一般報告 A、B、C とともに、それぞれの地域の特色や現状と、今後の観光とを照らし合わせ、独自の観点から持論を展開していくものであるが、置き換えた場合、市の観光を行政がどう主導していくか考える必要性を問われた内容であり、今後の施策に応用できるかは、慎重に議論が必要であり、熟慮するテーマであると思われる。

(4) 平成 29 年 11 月 9 日(木) 9:30-12:00

(会議) 第 79 回全国都市問題会議 (2 日目) (沖縄県立武道館)

(テーマ) 「ひとがつなぐ都市の魅力と創生戦略 ～新しい風をつかむまちづくり～」

① パネルディスカッション

(パネリスト) ・早稲田大学理工学術院教授・後藤春彦氏 (ファシリテーター)

・静岡県島田市市長・染谷絹代氏

・福井県勝山市市長・山岸正裕氏

・(株)能作・能作千春氏

・まちとひと感動のデザイン研究所代表・藤田とし子氏

・沖縄文化芸術振興アドバイザー・平田大一氏



(内容) 人と人のつながりが都市の発展を支えるという、今回の全国都市問題会議の主題について議論するに当たり、先ず、後藤教授が専門である都市計画論的な視点での持論を紹介。20世紀の方法論として重要な「分ける」という発想は、効率性や機能性を追求するために細分化するというものであったが、現在の方法論は「分かち合う」という、「人」と「人」の関わりやつながりにシフトしてきているとのこと。人口減少という社会的な問題が顕在化している現在、これまで「量」として問われていた人口が、「質」として問われるように変化してきていることを前提とし、パネリスト5名が所属する各団体等の地方創生、地域の活性化に向けた取組（地域との関わり合いや地域人材の発掘）事例紹介を促した。

(考察) 行政の働きかけに応え得る人材の重要性を改めて認識する機会となった。パネリストの平田大一氏（沖縄文化芸術振興アドバイザー）の体験談や産業として成り立つレベルまで育て上げることのできる人材という考えは、地方創生と持続的な地域活性化に不可欠なものといえる。あきる野市においても、如何に地域の核となる人材を育てるのか、或いは眠っている人材を発掘するのかということは、注力すべきテーマと考える。